日本における諸巡礼の発達

田中 智彦
岐阜聖徳学園大学

1　はじめに

巡礼は、キリスト教やイスラム教、仏教など世界宗教はもちろんのこと、ヒンドゥー教や神道など民族宗教、さらにはよりプリミティヴな宗教に至るまで、様々な宗教に認められる凡世界的な宗教現象である。

日本でも巡礼は長い歴史をもち、身近な存在としてよく知られてきた。日本において、巡礼は一般に「宗教行為」として認知されているが、堅固な信仰をもつ者に限らず、明確な信仰心をもたずとも実践される行為になっている。こうした意味で巡礼は、厳密な宗教行為ではなく、かなり曖昧さの残る宗教的行為ということができるであろう。

近年、精神的な意味で「いやし」という言葉が流行し、それを求める一つの手段とも考えられ、四国遍路[1]を志す者が多く見られようになってきている。徒歩巡礼者がかつてより、相対的に増加するなど、社会的にも巡礼に対する関心の高まりが感じられる。

それに呼応するかのように、巡礼研究も近年、特に四国遍路を中心として各分野から盛んになっている[2]。しかしながら、個別巡礼研究が進展し、個々の巡礼が明らかになればなるほど、日本の巡礼全体がどのようなものであるのか、その全体像が遠退いてしまうという逆転的現象も否めない。

本稿ではこうした観点から、日本における巡礼全体を考察の対象とし、巡礼とは如何なる行為であるのかを規定し、該当する種々の巡礼形式に検討を加え、その歴史的な発展とそれに付随する諸現象について、特に巡礼地に重点を置きながら考察してみたい。

2　巡礼の含意と巡礼形態

a）巡礼という用語

ここでは、巡礼が具体的に如何なる行為であるか、その定義を各種辞典・事典類から検討し、日本の巡礼の特徴を考えていきたい。

巡礼について国語辞典類を概観すると、国語学者の大槻文彦は「巡礼・順礼、諸国ヲ歴巡(へメグ)リ、所在ノ神社、仏閣ニ詣デ、礼拝スルコト。又其人」[3]と記す。また新村出は「信仰によって聖地・霊場を巡拝すること・・・諸所の霊場を巡拝する人」[4]と説く。このほか大野晋は「寺社・霊場を巡り、礼拝して歩くこと・・・特に、西国三十三所と巡り礼拝する人」[5]と記述する。

これら辞典によれば、まず巡礼の対象が、聖地、霊場、神社・仏閣であり、そして巡礼(順礼)が行為であるとともに、その行為を行う巡礼者をも指す用語であると指摘される。巡礼対象の

神社・仏閣や、聖地と霊場の相違については、煩雑になり、本稿の主題から外れるのでここでは検討を留保する。また、巡礼と順礼は両者が同時期に任意に用いられてきたのではなく、時代による表記の相違であることは既に拙稿で言及した[6]。

次に専門の研究者は、巡礼をどのように定義しているのか。巡礼は学際的な研究分野でもあり、実際に巡礼研究を行ってきた各分野の研究者達の記述を概観してみよう。

宗教学者の小池長之は「順礼とも記す。聖地や霊場をめぐって参詣の旅をし、信仰を深める宗教行事」[7]と記し、また「宗教上の所定の霊場を参拝して回る信仰行事、およびその参拝者」[8]とも記述する。

社会学者の前田卓は「宗教上の目的をもって聖地霊場を巡拝すること、およびその参詣者をいう」[9]と説明する。

一方、民俗学者の真野俊和は「順礼とも書く。本来は単に各地の霊仏霊場を参拝することをさしたが、次第に今日見られるような、一定のコースを定まった順序で巡拝する社寺参詣の形態に限られるようになった」[10]と説く。

同じく民俗学者の小嶋博巳は「一群の聖地を巡歴することによって完結するとみなされる参詣。またそれを実践する者。最も完成された形態は西国三十三ヵ所や四国八十八ヵ所の巡礼で、そこでは巡歴すべき聖地群(霊場)はある宗教理念によって聖なる数のもとに統合されており、一連の番号を付されて巡拝順まで規定されている」[11]と、述べている。

これら研究者達はともに、巡礼の対象が聖地・霊場であり、それを「めぐって参詣の旅」「参拝して回る」「巡拝」「巡歴」と表現は様々であるが、複数存在する対象をめぐるという点では共通理解がある。ただし真野や小嶋は巡礼の歴史性に触れて、当初はただ霊仏霊場、また一群の聖地をめぐることに限定されていたが、次第に聖数に統合され、一連の番号を付され、一定の経路でめぐるようになったという。

これら国語辞典や専門辞典類の巡礼項目に共通していえることは、巡礼は聖地、霊場、神社・仏閣を対象にして、めぐるという意味を有していることであり、日本の巡礼の特徴は文字通りめぐることにあるといえる。

ところで日本で最初に巡礼という語を用いたのは入唐僧円仁といわれ、彼の『入唐求法巡礼行記』[12]には、「次入崇福寺。巡礼仏殿閣下諸院」や「到五台山。巡礼聖跡」などの用例が認められる。円仁は渡唐して五台山を訪れたが、五台山は山塊自体が聖地であり、山内には寺院が点在する景観であった。円仁はこれら寺院を訪れ、巡礼していたのである。つまり円仁が用いた意味での巡礼は、山内の寺院をめぐることと考えられる。

山内の巡礼は、現在では、比叡山での回峰行に継承されている。比叡山での回峰行は、貞観年間(859-876)、円仁に師事した相応和尚に始まるとされ[13]、円仁が山内巡礼の考えを伝授したと考えても間違いはないだろう。巡礼という用語が修験的霊場をめぐることを指して用いられていた、という指摘もある[14]。

巡礼の説明で、聖地・霊場などを巡ることが特徴であると指摘したが、それは巡礼という用語の初出に遡って確認することができ、修行としての山内巡礼は、その後の巡礼の成立にも大きく影響を与えたものと思われる。

それでは日本語の巡礼に該当する語を、欧米の言語で検討してみたい。〝Oxford English Dictionary〟[15]で巡礼者に相当する Pilgrim の項をみると、次のように説明される。

〝One who travels from place to place.....One who journeys (usually a long distance) to some sacred place, as an act of religious devotion; one who makes a pilgrimage.〟また巡礼という名詞の Pilgrimage は、〝A journey made by a pilgrim; a journey (usually of considerable duration) made to some sacred place, as an act of religious devotion; the action of taking such a journey〟である。

フランス語の百科事典 〝Grande Larousse Encyclopedique〟[16]の Pelerin の項目は、

〝Personne qui, par devotion, va visiter un lieu consacre：Les pelerins de la Mecque, de Lourde〟と記述される。

ドイツ語では、巡礼者は Pilger のほか Wallfaher があるが、〝Deutsches Woerterbuch〟[17]の Pilger の項目には、〝1) der fremdling, der auslaender・・・2) nach der bedeutung des kirchenlateinishen peregrinus der wallfahrer nach einem fernen andachtsorte〟とみられる。

そしてこれら英・仏・独語はともに、巡礼者を表す用語はラテン語から借用されている。そこでラテン語の Peregre という用語を検索すると、〝To, in, or from foreign parts, abroad; a (denoting destination), b (denoting position or where-abouts), c (denoting place whence)〟となり、Peregrinus では〝(of person, etc) Foreign, alien〟となる[18]。

たとえば英語の Pilgrim あるいは Pilgrimage には、聖地を巡るという意味はなく、宗教的な信心から聖地を目指して長距離の旅をする者、あるいはその行為である。そしてその語源となるラテン語においても、よそ者、外国などの意味であり、日本の巡礼の特色として挙げためぐるという意味は含まれてはいない。

一般に、西欧などにみられる単一聖地をめざす巡礼は、日本では伊勢参宮や善光寺参詣などに該当すると考えられるが、これらを「巡礼」とするならば、上記で検討した一般的な意味での巡礼は別の用語を当てねばならないであろう。つまり日本語の巡礼と、ラテン語起源の用語では、用語の起源的な意味においても、今日用いられる意味においても同義ではないのである。

なお日本語の巡礼がラテン語起源の用語に対応させられたことは、明治期ではなく、既に近世初頭にみられる。ポルトガル人宣教師が作成した『日葡辞書』[19]の〝Junrei〟の項をみると〝Meguri vogamu. Peregrino, ou romeiro〟と説明され、また〝Junrei suru. Peregrinar〟と説かれている。

b）巡礼の構成要素と形態

本稿では巡礼の形態を比較検討するのが目的ではないが、巡礼行為あるいは巡礼地について考察を進める上で、形態の相違は大きな問題となる。それは、巡礼に関する用語の使用に関して大きな齟齬を引き起こす結果になるからである。

巡礼は、目的とされる聖地である巡礼地、巡礼行為を行う主体の巡礼者、聖地へと巡礼者が歩む巡礼路という、三つの大きな要素から構成されている。そして各要素が有機的に関連をもってはじめて巡礼は成立する。そうであるからこそどの一つの要素が欠如しても巡礼は成立しない。

ところで、巡礼に関するラテン語起源の用語と日本語では、めぐるという意味を含むか否か

で根本的な相違をみるが、それに呼応するように、巡礼の形態でも基本的な相違が認められる。たとえば、サンチャゴ・デ・コンポステーラやルルドなどヨーロッパの巡礼は、原則的に一ヵ所の聖地に向かう単一聖地巡礼であるが、日本では西国三十三ヵ所巡礼や四国八十八ヵ所遍路など複数の聖地をめぐる複数聖地巡礼になる。

次ぎに、巡礼の形態とその形態別に巡礼要素との関係を検討すると、巡礼者については、単一聖地への巡礼者であろうと、複数聖地への巡礼者であろうと、いずれも聖地に向かうという意味で大きな相違は認められない。

しかし、巡礼地は単一聖地か複数聖地かにより大きな相違がある。単一聖地巡礼の場合、該当する聖地をそのまま巡礼地として想定できるが、複数聖地巡礼の場合には個別の聖地が巡礼地に該当するのではなく、個々の聖地の集合体を巡礼地と考えるのが適切であろう[20]。特に、聖地が巡礼者によって任意に選択されるのではなく、全体として強い結束をもって構成されている場合には、聖地の集合全体が巡礼地と考えらえる。星野英紀によれば「ひとつの綜合体的聖地」[21]と表現されたものになる。円仁が巡礼した五台山のように、山内に個別寺院という聖地が存在するが、さらに五台山全体が大きな聖地になっていたのと同様である。

巡礼路は、巡礼者のみが利用するために特別に設置された経路ではなく、巡礼者も利用するが、主要な街道や地域住民が利用する経路でもある。巡礼路については、単一聖地巡礼か複数聖地巡礼かによって、その指示対象に大きな相違が生ずる。単一聖地巡礼、たとえば、サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼では、起点を異にする主要な4本の巡礼路があり、ピレネー山脈を越えたピュエンテ・ラ・レイナでそれらが1本に合流し、巡礼地を目指すことになる。この場合、巡礼路とはトゥール(パリとの説もある)、ヴェズレー、ル・ピュイ、アルルを発して、コンポステーラに向かう経路が巡礼路となる[22]。

ところが、複数聖地巡礼の場合、巡礼路は聖地の集合体としての巡礼地に至るまでの経路を指すことはない。たとえば、四国八十八ヵ所遍路では、聖地である札所には番号が付され、最初の聖地から最後の聖地に至るまでの経路が巡礼路(遍路道)と呼ばれるのであり、四国が外部と海で遮断された島という理由もあるが、四国に至るまでの経路は巡礼路と呼称されることはない。西国三十三ヵ所巡礼でも同様のことが指摘でき、最初の聖地から最後の聖地まで至る経路が巡礼路である。このように単一聖地巡礼と、複数聖地巡礼では、巡礼路の指示対象がまったく異なるのである。

3　日本における種々の巡礼

a)巡礼の形式

ここでは複数聖地をめぐる日本の巡礼に限定して論を進める。真野や小嶋の指摘にあるように、当初巡礼は、番号を付した聖地を定まった順序で、一定経路でめぐることに限定されてはいなかったが、巡礼の発展につれて個々の聖地に順番が与えられ、それらをめぐる経路が固定していったと考えられる。しかし、聖地の順序が定まる以前に、多くの日本の巡礼では、当初から所与の聖地数が重視されていたように思われる。西国巡礼の歴史的経緯を鑑みれば、33という観音にちな

む数があり、次にその数の聖地が選択されるが、聖地そのものを含めて順序は固定されず、最後に聖地の固定とそれに番号を付すことにより順序が固定され、経路が定まっていく。

このような巡礼の発達段階を想定するならば、最初期段階の巡礼、過渡的段階の巡礼、そして最終段階の巡礼があり、一つの定点を設定しないと、同一の巡礼が複数回数考察の対象となる危険性がある。そこで、原則として、所与の聖地数が決定し、巡礼者が任意に聖地を選択するのではなく、また聖地に番号が付与されていることを前提とし、それらの条件に該当する巡礼の形式について考察してみたい。時代性や巡礼の存在する地域、またそれをめぐる巡礼者の特殊性は考慮外として、現在までにみられる主な巡礼の形式について一覧としたのが表１である。

表１では、左端に聖地数、右欄にはその聖地数に対応した、巡礼者がめぐるべき種々の巡礼対象が記載されている。ただし表の統一を図るために、一般的に用いられている巡礼形式の名称とは相違する場合がある。

聖地数は３ヵ所から108ヵ所までが認められる。そしてめぐるという巡礼行為に照応して1ヵ所は除外され、２ヵ所から取り上げられるべきであるが、２ヵ所をめぐる行為は巡礼の範疇に入れられることはない。たとえば、伊勢参宮では内宮・外宮の２ヵ所の聖地(さらに朝熊山を含めて3ヵ所の場合もある)をめぐるが、巡礼とは呼ばれない。

また聖地数3ヵ所は微妙なところであり、多少恣意性が介在する。熊野詣では、本宮・新宮・那智の3ヵ所の聖地を巡り、また出羽三山詣では月山・湯殿山・羽黒山を巡るが、これらも一般的に熊野巡礼・出羽三山巡礼と呼称されることはない。しかし、ここに示した薬師如来を安置した聖地を巡る行為は、薬師めぐりなどと表現され、巡礼に含めることができる。ただし5ヵ所以上の聖地めぐりからは、明らかに巡礼に含めることができる。

聖地数は、巡礼対象との関連で明らかになるものもあるが、その根拠が判明し難いものも多い。たとえば、三十三観音の33という聖地数は、『妙法蓮華経』観世音普門品に観世音菩薩が33の化身を現して衆生済度を行う[23]とみられることに由来し、四十八阿弥陀の48という聖地数は、『仏説阿弥陀経』に説く、阿弥陀如来が四十八の誓願を立てた[24]ことに由来する。また親鸞聖人二十四輩の24という聖地数は、正暦1年(1333)に覚如が宗門の正当な門弟とした24人にちなみ、彼ら24人の遺跡をめぐる巡礼である[25]。円光大師(法然)二十五所も法然の足跡25ヵ所をたどる巡礼である。しかし弘法大師八十八所の88という聖地数は、諸説がみられるものの、いまだに定説がない。

右欄の巡礼者が目的とする対象には、釈迦如来・薬師如来・阿弥陀菩薩・地蔵菩薩・観世音菩薩・勢至菩薩・虚空蔵菩薩・不動明王・愛染明王・毘沙門天・歓喜天・閻魔王・弁財天・賓頭盧尊者・九品仏・十二光仏・十三仏など仏教諸尊があり、なかでも薬師・地蔵・不動・観音など庶民信仰に関わるものが多い。これら仏教諸尊への巡礼は本尊巡礼と呼称されることもある。

このほか、神社や神社に祭祀された神々をめぐる巡礼がある。天神・秋葉・神明・猿田彦・稲荷・霊符神・八幡・金毘羅・妙見が対象となっている。しかしながら神社をめぐる巡礼の大部分は、今日著しく衰退している。

このほか宗旨・宗派の祖師の遺跡や、彼らの足跡を追体験する巡礼がある。その対象は修験

表1　日本における主な巡礼の形式

聖地数	巡　礼　対　象
3	三薬師，三観音，三不動，三弁天，天神三社，秋葉三社，弘法大師三所，三霊場，三寺(浄土真宗)
5	五不動，神明五社
6	六阿弥陀，六地蔵，六観音，六歓喜天，聖徳太子六所
7	七薬師，七観音，七不動，七弁天，七毘沙門天，天神七社，猿田彦七社，七福神，役行者七所，七墓，七草
8	稲荷八社，八幡八社，八社
9	九品仏，霊符神九社
10	十観音，十金毘羅，十社，十祖師
11	役行者十一所
12	十二薬師，十二光仏，十二社，十二支
13	十三虚空蔵，十三仏，日蓮上人十三所，十三所
15	十五毘沙門天，稲荷十五社，八幡十五社，妙見十五社
16	十六不動，西山国師十六所
17	十七愛染，神明十七社
18	十八阿弥陀，十八歓喜天，秋葉十八社，元三大師十八所，十八壇林，真言宗十八本山
21	二十一阿弥陀，二十一歓喜天，神明二十一社，二十一社，弘法大師二十一所，日蓮宗二十一所
22	賓頭廬二十二所，二十二社
24	二十四地蔵，二十四社，親鸞聖人二十四輩，ぼけ封じ二十四所
25	二十五勢至，二十五閻魔，天神二十五社，円光大師二十五所，真盛上人二十五所，花の寺二十五所
26	二十六愛染,二十六薬師
28	二十八不動，二十八地蔵，稲荷二十八社，聖徳太子二十八所
29	二十九弁天
32	三十二釈迦，三十二不動
33	三十三薬師，三十三観音，三十三金毘羅，三十三弁天
34	三十四観音
36	三十六地蔵，三十六不動，尼寺三十六所
37	三十七地蔵
48	四十八阿弥陀，四十八地蔵，四十八観音
49	四十九薬師
50	五十地蔵
55	日蓮宗五十五本山
66	六十六地蔵，六十六部
88	弘法大師八十八所
100	百観音，百地蔵，百不動，百弁天
108	百八地蔵

＊現行の巡礼だけでなく、歴史的な巡礼も含む。ただし巡礼者が任意に聖地を選択するようなものは除外した。
＊表記は慣例と相違するものが多いが、敢えて全体の統一を目指した。
＊出典は、中尾堯『古寺巡礼辞典』、東京堂、1973；斎藤昭俊『仏教巡礼集』、仏教民俗学会、1975；拙稿「近世大坂における巡礼」、大阪商業大学商業史研究所紀要3、1994；大法輪閣編集部編『全国霊場巡拝事典』、大法輪閣、1995；その他を基礎資料とした。

道の開祖役行者、日蓮宗の開祖日蓮上人、浄土宗西山派の西山国師、浄土真宗の開祖親鸞聖人、浄土宗の開祖円光大師、天台宗真盛派の真盛上人、そして真言宗の祖である弘法大師である。これらの巡礼は祖師巡礼とも呼ばれる。

その他には、種々の巡礼、あるいは近年の「巡礼」が含まれている。前者には、浄土真宗の寺院を3ヵ所めぐる三寺参り、7ヵ所の墓地をめぐる七墓巡り、全国に法華経を奉納する六十六部などがある。また最近の「巡礼」には、様々なニーズを巡礼行為に当てはめたものがみられ、ぼけ封じ二十四所や、秋の七草を植えた寺院をめぐる七草巡り、境内の花が美しい寺院をめぐる花の寺二十五ヵ所、真言宗や日蓮宗の本山をめぐる巡礼、また尼寺をめぐる尼寺三十六ヵ所などがある。

b）諸形式の巡礼の成立

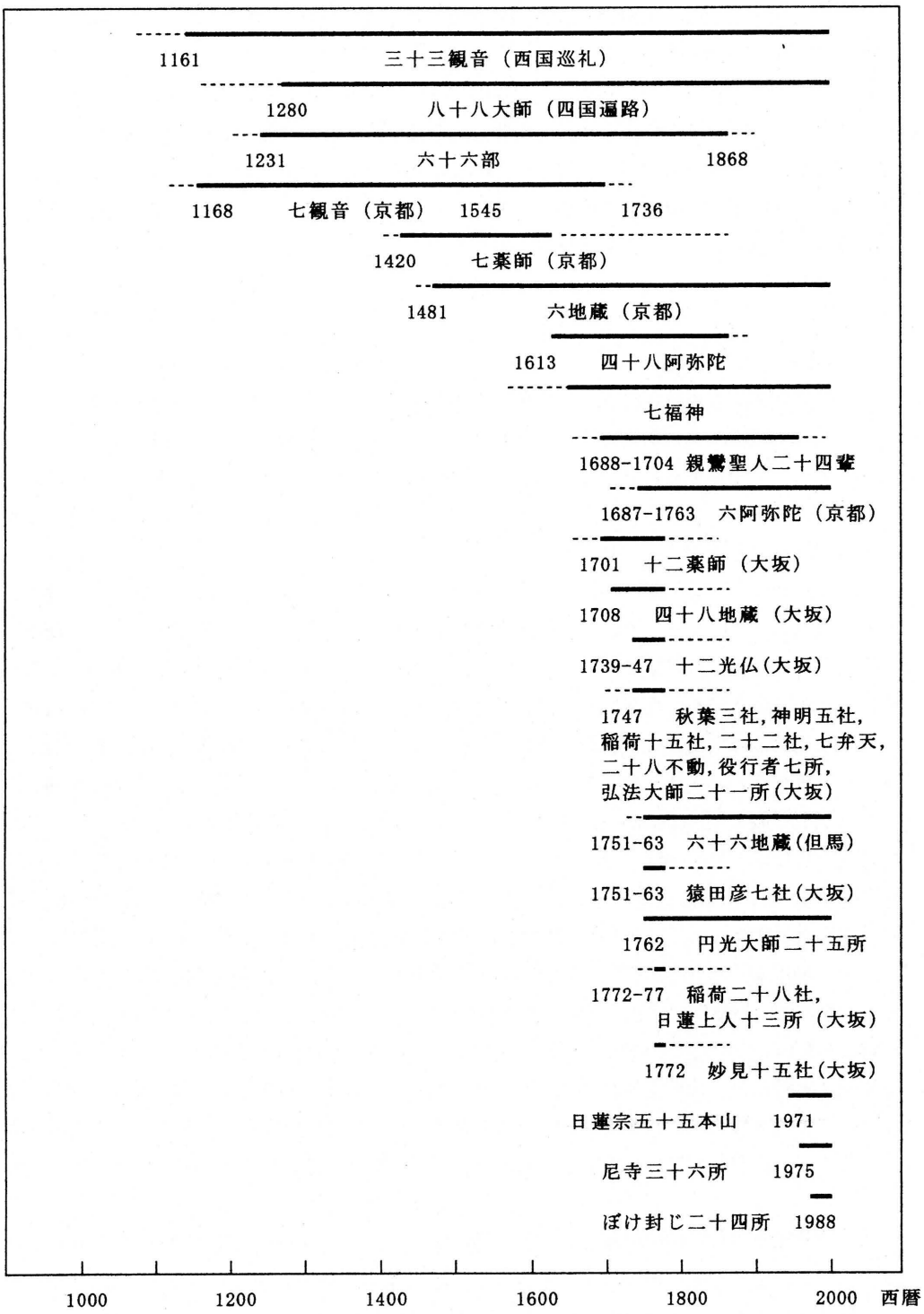
ここでは諸形式の巡礼が成立し、現れてきた時期について検討してみたい。成立年が明白になる巡礼は、近年成立のものを除いて非常に少ない。表1の諸形式の巡礼について、史料から最も早い時期の記載を参考にして、成立時期を検討してみると図1になる。表1の巡礼には、成立時期が明らかでないものが多く、図1には表1の巡礼のうちおよその成立年が判明するきわめて限られたもののみを記載した。

図1によれば、平安末期や中世に成立したであろう巡礼よりも、近世に成立したであろう諸形式の巡礼の方が圧倒的に多い。特に近世でも初期や末期ではなく、中期に成立したものが多い。成立時期を大きく四期に分けることができ、その一は平安末期から鎌倉期、その二は室町中期、その三は元禄から明和頃までの近世中期、そして高度経済成長期以後の現代である。

平安末期から鎌倉期に成立した諸形式の巡礼には、三十三観音・七観音・六十六部・弘法大師八十八所がある。これらのうち比較的早くから確認できるのが、今日の西国三十三所へと発展する三十三観音巡礼である。『寺門高僧記』[26]によれば、園城寺の行尊(1055－1135)が三十三所巡礼をしたことがみられ、やや遅れて同じく園城寺の覚忠が「応保元年(1161)正月三十三所巡礼則記之」として、巡礼をしている。したがってこの巡礼は天台寺門派の関与により、平安末期に成立したと考えられている[27]。行尊は「両山修行継役行者。歌仙能筆名留後代。笙窟冬籠給之時・・・観音霊所三十三所巡礼。日数百廿日」とみられ、大峰山・葛城山で役行者にならい修行をし、笙岩窟で冬籠し、そして三十三所観音巡礼を行っている。成立当初のこの巡礼の特徴は、大峰山・葛城山での山伏の修行の一環として位置づけられていたことである。こうした傾向は、その後、室町期に民衆が巡礼に参加するようになってからも中世を通じてみられる[28]。近世になると、民衆主体の巡礼になり、今日まで継続する。なお巡礼の発展にともない、巡礼者が変化すること、また西国巡礼を模倣した巡礼地が全国に成立していくことに関しては、次章で扱う。

次いで京都市中の七観音がある。これは『愚昧記』仁安3年(1168)5月21日条に「即相伴詣七観音、近代貴賤成群参詣」[29]とみられ、その後、室町期の『蔭涼軒日録』『実隆公記』『康富記』などの日記類にも頻出する。そして『言継卿記』の天文14年(1545)9月28日条に「七観音へ参詣了」[30]と認められることから、中世末までは明らかに巡礼が行われていたことが確認できる。しかし、

図１　諸形式の巡礼の成立



その後は史料が欠如し、巡礼が継続していたかについては未確認である。

六十六部(六部)は、壱岐・対馬を除く、全国六十六の旧国をめぐる巡礼である。これは各国の一宮あるいは国分寺(著名寺社も含む)に法華経を一巻ずつ奉納していく巡礼であり[31]、塚を築いて経典を埋納することも多い。中世では埋納した経筒に巡礼聖などの用語が見られることから、専門的宗教者が行っていたものと考えられ、また近世では野田泉光院のような修験者が六十六部を行っている[32]が、一般民衆も六十六部巡礼をしている[33]。中世と近世では同じ六十六部でも変容がみられ、近世中期以後の六十六部はほとんど経塚建立をせず、満願に際して六十六部供養塔を建立するようになる[34]。供養塔は全国に多数存在することから、かなりの巡礼者がいたものと推測されるが、近代以後は急速に衰退し、現在では消滅してしまっている。

平安末期から中世初めにかけての古い巡礼には、このほか今日の四国八十八ヵ所遍路につながる弘法大師八十八所がある。「醍醐寺文書」には「一　不住院主坊事者、修験之習、以両山斗藪瀧ママ山千日坐巌屈ママ冬籠、四国辺路三十三所諸国巡礼・・・」[35]と記される。辺路という語が記されるだけなので、聖地数が88ヵ所であるか定かではない。この時期の四国遍路は、三十三所諸国巡礼(後の西国三十三ヵ所巡礼)とともに、山伏の修行として実践されていた。中世の遍路は史料が欠如して不明な点が多いが、中世末の16世紀の墨書からは当時、僧侶などの宗教者に混じり、俗人の遍路もあったことが知られている[36]。

先の時代の巡礼を除き、室町中期に確認できる巡礼は、七薬師・六地蔵であり、京都市中の巡礼である。これはこの時期の史料に貴族の日記が多いことが一因であるかもしれない。七薬師(七仏薬師)は、『康富記』の応永27年(1420)9月9日条に「又明日可有七仏薬師詣」[37]と記され、当時この巡礼が貴族の間で行われていたことが明らかになる。また『親長卿記』の文明16年(1484)10月21日条にも「今日参詣七仏薬師」[38]とみられ、中堂・護国寺・法界寺・蓼倉・東寺・広隆寺・因幡堂が記される。このように室町中期には盛んに行われていた巡礼である。近世に入ると黒川道祐『日次紀事』[39]に「七所薬師詣」がみられるが、その後の史料には現れず、どの程度行われていたのか疑問が残る。

六地蔵巡礼は、仁寿2年(852)に小野篁が6体の地蔵を刻んで伏見に安置し、保元2年(1157)に平清盛が京都の六ヶ所に地蔵堂を建立し、それを再安置したことに始まるとの説があるが[40]、巡礼の成立については疑問が残る。『宣胤卿記』の文明13年(1481)2月29日条に「食後令同道参詣六ケ所地蔵、毎月儀也」[41]と記載され、毎月の六地蔵巡礼が、慣習化していたことを窺わせる。この記述は六地蔵巡礼の普及を示すものであり、六地蔵巡礼の成立はこれ以前であっただろう。近世には『京羽二重』に「六地蔵廻」[42]とみられ、現在まで継続する巡礼である。

近世に入り、元禄から明和頃までに成立が確認できる巡礼としては、親鸞聖人二十四輩・六阿弥陀・十二薬師・四十八地蔵・十二光仏・秋葉三社・神明五社・稲荷十五社・二十二社・七弁天・二十八不動・役行者七所・弘法大師二十一所・六十六地蔵・猿田彦七社・円光大師二十五所などがある。室町中期の諸巡礼が貴族の日記により、京都市中に限定されていたのと同様に、近世の巡礼は史料の制約により大坂市中の巡礼が多数を占める。これらのうち大坂市中以外をも範囲とする巡礼は、親鸞聖人二十四輩、六阿弥陀、円光大師二十五所、六十六地蔵であり、六十六地蔵以外は比較的広範囲の巡礼である。大坂市中の巡礼は、明和9年(1772)の序をも

つ『大坂寺社順拝記』に大部分が掲載されるので、およその成立時期が推測できる。大坂の巡礼については、既に拙稿[43]で言及しているので、ここでは大坂以外の巡礼について触れておこう。

親鸞聖人二十四輩は、正暦1年に覚如が親鸞の門弟24人を選出したことに由来するといわれるが、巡礼が成立したのは、元禄前後と考えられている[44]。近世には、『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』、宝暦5年(1755)や『二十四輩参詣記』、明和4年(1767)など数多くの出版物がみられ、近代以後も多くの出版物がみられる[45]。

六阿弥陀は、京都の六阿弥陀巡礼が古く、木食正禅(1687-1763)が阿弥陀仏の霊感を受け創設したとされ、今日でも『全国霊場巡拝事典』に掲載される[46]。

円光大師二十五ヵ所は、いわば法然の一代記・専修念仏・奇瑞・庶民教化などが語られる巡礼であり、京都知恩院を中心にして組織されたと考えられている[47]。この巡礼は、かなり大規模な組織の関与があったと考えられ、明和年間の道標が、各地で確認されている[48]。

六十六地蔵は、但馬国だけにみられる66ヵ所の地蔵の聖地をめぐる巡礼であり、六十六は六十六部に由来する。この巡礼の札所には、安永8年(1779)の詠歌額が確認されており、その成立は宝暦年間(1741-63)であろうと推測されている[49]。

現代、高度経済成長期以後に成立した巡礼の諸形式は、日蓮宗五十五本山・ぼけ封じ二十四所・尼寺三十六所などであり、巡礼の分類の上では本尊・神社・祖師それぞれの巡礼に該当しないものが大部分である。これらの巡礼は、原則として徒歩ではなく、自動車や交通機関を利用してめぐることを想定した巡礼であり、巡礼路はその意味を失っている。

以上、諸形式の巡礼の成立時期について検討してきたが、平安末期から鎌倉期に現れた巡礼は比較的広範囲な巡礼であり、七観音を除くと修行的な側面が大きい。それに対して、室町中期や、近世元禄から明和頃にみられる巡礼の形式は、親鸞聖人二十四輩や円光大師二十五所などを除くと、京都や大坂といった都市を範囲にした狭い範囲の巡礼形式である。また現代の巡礼は、巡礼と称しながら、巡礼路が意味をもたず、各種交通機関を利用してめぐるため、その範囲は広くなっている。

新たな形式の巡礼が現れてくる時期は、それ以前とは違う画期を表わしていると思われるが、その歴史的背景・社会情勢なども含めて今後考察する必要があるだろう。

ここではあくまで諸形式の巡礼が初出する時期について検討してきたが、個別巡礼に言及してきたわけではない。これらの形式の巡礼をもとに、各地で個別巡礼が成立しているわけである。三十三観音ならば西国巡礼を原型として、各地にそれを模倣した巡礼が成立している。次にこうした各地の巡礼の成立も含めて、巡礼の発展が引き起こす諸現象について言及したい。

4　巡礼発展の諸相

巡礼はその発展過程において、巡礼者・巡礼地・巡礼路など巡礼の要素ごとに様々な現象を生み出している。代表的な巡礼である西国巡礼・四国遍路を中心として、これら諸現象について考察していきたい。ただしここでは全体としての巡礼地に対象を限定し、個別聖地である札所の発展は取り上げない。

a）巡礼者の変化

まず巡礼の発展を巡礼者に焦点を当てて検討する。西国巡礼や四国遍路では、巡礼の成立当初、既にみたように山伏など宗教者が修行の一環として巡礼を行っていた。ところが西国巡礼では室町中期、四国遍路では中世末に、宗教者に混在して一般民衆の巡礼者がみられるようになる。そして西国巡礼では近世に、巡礼者の大部分が遊山も含めた民衆になり、四国遍路でも近世末に民衆の遍路が盛んになる。なお六十六部も中世には六十六部聖などと呼称された、宗教者が修行として巡っていたものが、近世には民衆も参加するようになる。こうした修行として宗教者が主流であった巡礼から、民衆の巡礼に変化していくことが巡礼の発展過程でみられる。これは巡礼の発展にともなう、巡礼者の質的な変化とみることができる。

ただし図1に示した七観音など京都市中の比較的狭い範囲をめぐる巡礼や、近世に成立した大坂市中をめぐる巡礼の場合には、距離も短く、当初から修行的側面が少ないため、巡礼者の質的な変化を認めることができない。

巡礼者の質的な変化と同時か、やや遅れて、さらに次なる変化が巡礼者にみられるようになる。民衆が巡礼に参加する結果、巡礼者数の増加が喚起される。西国巡礼では、元禄期と文化・文政期に巡礼者数の急激な増加が確認され、四国遍路では文政から天保期に遍路者数が急増する[50]。こうした時期が巡礼の発展期といえる。

また巡礼者数の増加とともに、巡礼者の出身範囲の拡大、つまり巡礼者が以前よりさらに遠方から訪れるようになることを指摘できる。たとえば、秩父三十四ヵ所観音巡礼では、昭和30年代前半には、巡礼者が地元か周辺地域に限られていたが、昭和40年代後半になると、巡礼者の出身地域が拡大し、全国から巡礼者が訪れていたことが検証されている[51]。

以上、巡礼者に関しては、巡礼の発展によって、巡礼者の質的な変化がみられ、巡礼者数が増加し、また巡礼者の出身範囲の拡大がみられる。

b）巡礼手段の変化

現代の四国遍路では、飛行機により札所上空を飛行して遍路するという、時間的に短縮を計った遍路がみられる。札所上空を飛行したとはいえ、それが遍路かという議論も生じるところである。飛行機ではなくとも、大多数の遍路者は、バス・自家用車・タクシーなどを利用することが多い。当然のことながら、自動車による巡礼では巡礼路は意味を有さず、その存在さえ不確かなものとなる。自動車を利用した場合、巡礼路が無意味となる以上、巡礼と一般の社寺参詣との相違が明白ではなくなる可能性もある。

さらに自動車ではなくとも、近代的交通手段を利用した場合、特に歴史の古い巡礼では、巡礼路だけでなく、札所に付された順番さえも無意味になる可能性が認められる。たとえば西国巡礼では、大正11年(1922)の西国札所聯合会編『西国順礼案内記』によれば、京都を中心にして33ヵ所の札所を東部・西部・南部に分割し、札所の番号順でなく、方面別に既往の交通手段を利用した経路が案内されている。このような巡礼は、かろうじて33ヵ所という札所数が有する統一原理によって、巡礼としての同一性を認知できる状況である。

多くの疑問を生じさせるものの、巡礼に近代的・現代的交通手段が持ち込まれていることは、

巡礼の発展の一現象と考えられるであろう。

c）巡礼地の簡略化

巡礼地に関しては、時間的・空間的に簡略化した巡礼地が現れる[52]。これらは本来の巡礼地の縮小化であり、従来、地方巡礼、ミニチュア巡礼などと呼称されていた。これらの巡礼は、巡礼者の出身地域を基準に分類すると、全国から巡礼者を集める全国的巡礼地、限定された地域から巡礼者が訪れる地域的巡礼地、さらに小範囲からの巡礼者が訪れる石仏を配置した程度のミニチュア巡礼地に区分することができる[53]。巡礼地の簡略化、縮小化は、原型となる巡礼が距離も長く、経済的・時間的・身体的な負担が大きなことに対する一種の方便であることはいうまでもない[54]。

西国三十三ヵ所を模倣した地域的巡礼地は、近世までに近畿地方に成立したものだけでも64を数え[55]、全国的には三十三所で200以上ともいわれ、また四国八十八ヵ所では全国で約150と推測されている[56]。ただし、これは主に地域的巡礼地を概算した数値である。ミニチュア巡礼地は、和歌山県だけで三十三ヵ所が33、八十八ヵ所が26存在すると報告されているが[57]、全国のミニチュア巡礼地数については調査研究がみられず、その概数さえ不明である。

ところで、巡礼地の簡略化・縮小化は、本来の巡礼地を模倣した第二次的な巡礼地である地域的巡礼地から、さらに第三次的な巡礼地を派生させることがある。たとえば西国巡礼を模倣して、かつて全国各地に地域的巡礼地が多数成立し、また現在でも成立しているが、こうしたものの一つに津軽三十三ヵ所観音巡礼がある。この巡礼は延宝年間(1673-1681)には成立しており[58]、その後札所の組み替えを経て今日に至っている。そして津軽三十三ヵ所巡礼からは、それを模倣した、第三次的なミニチュア巡礼地が弘前市長勝寺境内に成立している。

第二次的・第三次的巡礼地は、三十三観音にみられるだけではなく、その他の形式の巡礼でも認められる。親鸞聖人二十四輩は北陸・関東地方を中心として巡るものであるが、大坂市中にも第二次的な巡礼地が認められる[59]。また円光大師二十五ヵ所も近畿・中国地方を中心とする巡礼地であるが、伊勢[60]・伊賀[61]・但馬[62]などに第二次的な巡礼地が発達する。さらに寺院境内に石仏の円光大師像を配置した、第三次的なミニチュア巡礼地さえ確認できる[63]。また六十六地蔵の二次的なミニチュア巡礼地が、兵庫県和田山町に設けられている[64]。

ところで簡略化・縮小化された巡礼地の成立をみると、西国三十三ヵ所を模倣した地域的巡礼地は、鎌倉期に坂東、室町期に秩父・洛陽・遠江・武蔵足立郡・陸奥南部糠部郡・岩城・出羽最上郡・越後・上野吾妻郡・信濃小県郡・淡路・周防などの各地にみられる[65]。このうち坂東巡礼は早い時期に全国から巡礼者を集めるようになり、また秩父巡礼も札所を33ヵ所から34ヵ所とすることで、日本百観音の一部となり、全国展開するようになる[66]。したがって、この二つ以外の巡礼が地域的巡礼としてとどまることになる。そして近世になると、各地に多数の三十三観音の地域的巡礼地が成立する。

四国八十八ヵ所を模倣した巡礼地では、中世成立のものはほとんどみられず、すべてが近世以後、特に文化・文政期となる。これは四国遍路の発展が近世末であったことと関連するものであろう。近世成立の八十八ヵ所のなかでも比較的早い時期のものは、宝暦4年(1754)の下総

佐原市・下総町等、宝暦頃(1751-1763)の江戸、元文元年(1763)の安房、正徳年間(1711－1716)の甲斐一国、寛保3年(1743)の備前神島、貞享3年(1686)讃岐小豆島などである[67]。

巡礼地の簡略化・縮小化をさらに進めると、西国三十三ヵ所や四国八十八ヵ所本尊の模刻を一堂に安置した三十三所堂や八十八所堂[68]、「お砂踏み」や階段の手すりに四国八十八ヵ所の砂を封入したものなど、そして西国巡礼の本尊を一幅に描いた観音曼陀羅[69]などに至るまで縮小されていく。もちろんこれらを巡礼の範疇に含めるかどうかは議論の余地があるところである。

歴史的にみると、岩坂護田寺の慧均監院が仏工に命じ、三十三体の観音像を刻ませて安置した、「越前河合荘岩坂三十三所巡礼観音」が明応8年(1499)に設けられたと、『天陰語録』にみえている。これは「一称一礼之人。不起座不移歩。南而那智。東而谷汲。巡礼了也」[70]と記されるので、おそらく地域的三十三ヵ所巡礼やミニチュア巡礼ではなく、三十三所堂であると推測される。また『蔭凉軒日録』の文明18年(1486)11月3日条にも「蓋三十三所之観音木像安之供養也」[71]とみられ、三十三所の本尊の木像が作成されていたことが明らかになる。

このほか『竹居清事』には「搏桑西州三十三所巡礼観音堂図記」と題して、「宝徳中。備前牛窓霊鷲寺玉仲瑛書記。創意命工。絵三十三所而作三十三幅也」[72]とみられ、三十三所の堂宇を一幅ずつ描いた三十三所の絵画が作成されていた。また『康富記』の宝徳2年(1450)2月25日条には「伊勢塔勧進聖謁之、三十三所順礼観音摺本画一舗、出之」[73]と、三十三ヵ所本尊の刷り物が作成されている。

地域的巡礼地やミニチュア巡礼地は近世以後のものが多いとはいえ、三十三所堂や三十三観音図幅などは、既に室町中期から末期にかけての作例をみる。

なお巡礼地について最後に指摘しておきたいのは、各時代により様ざまな規模の巡礼地が成立し、それに伴い新たな形態が生じるのも巡礼発展の結果と考えられる。

d)巡礼地の外延的拡大

巡礼の発展について視点を変えてみるならば、巡礼地の外延的拡大が考えられる[74]。本来、巡礼は最初の札所から始まり、最後の札所で終了するはずである。儀礼からみるならば、西国巡礼開始の儀礼は確認できないが、巡礼の終了に際しては儀礼がある。西国巡礼最後の札所、谷汲寺(華厳寺)の詠歌で「今までは親と頼みし笈摺を脱ぎて納むる美濃の谷汲」と歌われるように、巡礼者は巡礼終了に際してそれまで着用していた笈摺や杖を奉納して帰路に着く。そのため谷汲寺には、笈摺を納める笈摺堂が設けられている。また本堂の柱に打ち付けられた金属製の鯉に触れて、下山するとも伝えられる。

こうした儀礼は他の巡礼でも認められ、四国札所88番の大窪寺では遍路が終了すると笈摺や杖を奉納し、秩父札所34番の水潜寺では笈摺・杖の奉納のほか、境内にある「水潜りの岩屋」をくぐり抜けてから帰路につく慣習がある。このように巡礼は最後の札所で終了し、巡礼者は巡礼装束を脱ぐ儀礼を通じて再生し、新たな人間として帰路につくのである。

ところが巡礼の発展にともない、最後の札所で終了するはずの巡礼が、巡礼地の外側に広がると想定されることがある。たとえば近世の西国巡礼では、主として東国の巡礼者の場合、谷汲寺からさらに信濃国善光寺へと参詣する。谷汲寺門前には善光寺を指す道標さえみられる。

そして善光寺が実質的に、西国巡礼の延長上に位置づけられ、巡礼終了後、善光寺参詣をするものとみなされるようになる。それを反映して、加古川市鶴林寺境内や兵庫県揖保郡太子町の斑鳩寺境内のミニチュア巡礼地のように、善光寺如来を西国三十三ヵ所の本尊と並立させるところが少なくない。

また秩父巡礼は、水潜寺で巡礼を終了するが、近世には水潜寺からの帰路に西国堂なる小堂が建立され、西国三十三ヵ所の本尊模刻が安置されていた[75]。現在では、撤去され、その痕跡さえ確認できないが、この西国堂も秩父巡礼がさらに西国巡礼へと継続、発展することを示唆する、巡礼地の拡大と捉えられよう。

さらに四国遍路でも、大窪寺で巡礼が終了するとはいえ、満願後に高野山参詣する慣習が一般的になっており、このことも巡礼地が外延的に拡大した結果と理解することができる。

ところで西国巡礼では巡礼開始に際して儀礼が認めがたいと述べたが、秩父巡礼、四国遍路でも同様である。しかし儀礼が認められないとはいえ、いずれの巡礼も札所1番から巡礼が開始されることに間違いはない。そして巡礼の発展は、札所1番の前にも巡礼地を拡大させる結果となる。

近世の西国巡礼では、札所の順序通りに巡る場合、巡礼者は伊勢参宮後に、札所1番の那智山(青岸渡寺)を目指す。伊勢田丸から東熊野街道を進んだ原集落に、観音庵(現・石仏庵)という庵室が設けられ、いつ頃からそのように呼ばれたのか定かではないが、観音庵の本尊は「順礼道引観音」と呼ばれた。本堂前には文化2年(1805)に江戸講中の建立になる石標がみられ、本堂には巡礼者の納札も打ち付けられている。そして天保11年(1840)の案内記には「西国札所始まり」とさえ記載するものがある。これは明らかに観音庵が巡礼地の一部であることを強く主張するものである。観音庵からさらに約5Km進んだ柳原集落には千福寺があり、この本尊も「順礼手引観世音」と呼ばれる。これも観音庵同様の主張を行っているものと解釈できる。

四国遍路でも鳴門から札所1番霊山寺まで至る経路に、種まき大師(東林院)が札所1番奥の院として、また談義所(十輪寺)が札所1番前札とされており[76]、巡礼地の前方向への外延的拡大とみなすことができる。

このように巡礼の発展は、最初と最後の札所の前後方向への巡礼地の拡大を引き起こしている。

e)巡礼地の内部的発展

巡礼地の発展は、巡礼地内部でも様々な現象を生む。その一つが番外札所である。日本の巡礼では所与の聖地数が決定しており、札所数は原則的に変更不可能なものである。しかし、巡礼地を規定数の札所で構成した場合、歴史や由緒を有しながら札所から欠落した寺院などが生じる。こうした寺院は、札所への加入を意図するが、巡礼地の規定数を変更をしない限りそれは実現できない。そこで巡礼が発展する過程で、こうした寺院などを含める形で、番外札所が成立する。

番外札所という考え方は、古くから存在するものではなく、近代以後のことと思われる。たとえば西国巡礼では現在、法起院・元慶寺・花山院(菩提寺)の三か寺が番外札所として認められるが、このうち番外札所を最初に企図したのは花山院であったと考えられる。花山院は、近世の巡礼案内記や巡礼者の道中日記にはまったく現れない寺院である。しかし花山院は、西国

巡礼の縁起とも関わる花山院が晩年居住した寺院と伝えられる[77]。西国巡礼札所24番中山寺の門前には、花山院を指す安政2年(1855)の2mをこす巨大な道標が建立され、また札所25番清水寺境内にも文化3年(1806)の花山院を指す道標が建立されている[78]。したがって近世末に西国巡礼地への積極的な関与を目指したものであろう。しかし、実際に番外札所として認定されていくのは近代に入ってからであった[79]。

四国遍路などでも今日、番外札所がみられるが、これらには近世札所の奥の院であったところや、多くの遍路者が参詣した寺院が多い。このような寺院が、遍路発展の過程で番外札所としての位置を占めるようになっていくと考えられる。ただし番外札所についての本格的な研究はまだ行われておらず、今後の課題でもある。

一方、巡礼の発展は巡礼地内部において、巡礼路にまた別の変化をもたらすことになる。元来、巡礼路は、聖地である札所を結ぶ経路であり、特に札所に順序がある場合には、順次札所を巡るだけのものである。しかし巡礼の発展にともなって、巡礼者は巡礼地内部にある札所以外の著名社寺(番外札所もその一つである)に参詣し、また名所旧跡を訪れ、さらに巡礼路の危険な区間を回避するなど、元来の巡礼路を外れて巡礼するようになる。したがって元来一本の線として描かれていた巡礼路が、巡礼地内部で分岐して発達するようになる。元来の巡礼路を基本的経路、それ以外の後に発達した付随的な経路を発展的経路と分類することができる。

近世の西国巡礼を例にとれば、札所1番那智山(青岸渡寺)から札所33番谷汲寺まで、札所を順序通りに結ぶ経路が基本的経路となり、それから外れる経路が発展的経路となる。主な発展的経路は、札所3番粉河寺・札所4番槇尾寺間に高野山参詣する「高野廻り」、札所4番槇尾寺・札所5番葛井寺間に大坂市中を見物する「大坂廻り」、札所6番壺阪寺・札所7番岡寺間に吉野参詣する「吉野・多武峰廻り」、札所13番石山寺・札所14番三井寺間に札所31番長命寺・札所32番観音正寺を先取りして巡る「石山より逆打」、札所14番三井寺から京都市中の札所への間に比叡山に参詣する「比叡山廻り」、札所19番革堂から愛宕山参詣して札所20番善峰寺までを逆打する「愛宕越え」、札所24番中山寺の次に札所28番成相寺までを逆打する「兵庫廻り」、以上7経路である[80]。そして、近世中期以後の巡礼者の道中日記を検討すると、東北・関東など東国から訪れた巡礼者はこれらの経路を大部分利用し、九州・中国など西国からの巡礼者も「兵庫廻り」の一部区間を利用しないとはいえ、その他の経路は利用している。ただし、畿内・近国の巡礼者には発展的経路を利用せず、基本的経路を主として利用する者もみられる。つまり近世半ば以後、大多数の巡礼者は、基本的経路ではなく、発展的経路を利用していたといっても過言ではない。

発展的経路の成立時期や、それを設定した主体については明らかにならないことが多いが、これら発展的経路のうちで「石山より逆打」については、成立時期をある程度絞り込むことができる。この経路は、札所30番竹生島から札所31番長命寺まで、琵琶湖上10里の渡船に乗らない。宝暦6年(1756)には渡船が転覆して72人が死亡する事後が起きたが、「石山より逆打」では渡船の難破・転覆などの危険を回避することができる。種々の巡礼案内記や道中日記を史料として検討を加えると、安永2年(1773)の案内記には「石山より逆打」の記載はないが、安永3年(1774)の案内記には張り紙でこの経路が案内され、また巡礼者の記録でも安永9年(1780)の者が利用することから、おそらく安永初めには「石山より逆打」経路が成立したと推測できる[81]。

「石山より逆打」のような危険回避の経路のほかに、河川の増水の際の迂回経路で成立年が明らかになるものがみられる。秩父巡礼では、巡礼路が荒川という比較的大きな河川を何度か渡るが、増水の際には別経路を案内する一枚刷りが宝永2年(1705)に刊行されている[82]。これも巡礼の発展に伴う、発展的経路の一つと考えることができる。

以上のように、巡礼地内部では、巡礼の発展にともなって、番外札所の成立、巡礼路のうち発展的経路が基本的経路から各所で分岐して発達するという現象が現れてくる。

5　まとめ

本稿では、日本の巡礼の特徴として巡ることが重要であることを用語の意味に遡って検討し、その上で巡礼の範疇に含まれる種々の形式を聖地数と巡礼対象とを基準として一覧として示した。その結果、聖地数は3から108までが認められ、それに呼応した種々の参詣対象があり、仏教諸尊、神社、宗旨・宗派の祖師、その他がみられた。

そしてこれら巡礼形式のうちおよそ成立年代を確認できるものを図示すると、古くは平安末期から鎌倉期に成立した巡礼、次いで室町中期にみられる巡礼、そして近世元禄から明和頃に成立した巡礼、最後が高度経済成長期以後の現代に成立した巡礼に時期を区分できた。これらの時期の特徴は、平安末期からの巡礼では巡礼地が比較的広範囲のものが多く、室町・近世の巡礼では都市内のものが多く、さらに現代の巡礼では、その他の形式に含まれるものが多いことがあげられた。

次いで、巡礼の発展に焦点を当て、西国巡礼・四国遍路を主な事例として、巡礼の発展に伴う諸現象について、巡礼者・巡礼地・巡礼路という要素別に検討した。その結果、巡礼者については、宗教者から民衆へという巡礼者の質的な変化、巡礼者数の増加、巡礼者の出身範囲の拡大が考えられた。

巡礼手段の変化では、巡礼の発展にともない、近現代的な交通手段が巡礼に利用されるようになるが、そのために巡礼要素のうち巡礼路や聖地が意味をもたなくなる傾向があり、こうした行為が本来の巡礼と照合して巡礼かどうか疑問が生ずる。

巡礼地では、巡礼地の簡略化・縮小化がいわれてきたが、それが第二次的な巡礼地のみでなく、第三次的巡礼地をも派生させていることを指摘した。また巡礼は、通常札所1番から最後の札所で終了することが儀礼から推測できるが、巡礼の発達は最後の札所からさらに巡礼地を外延的に拡大し、西国巡礼では善光寺、四国遍路では高野山をも取り込んだ形となっている。また、札所1番より前方にも外延的拡大がみられ、「順礼道引観音」「順礼手引観世音」なるものを成立させている。

最後に、巡礼の発達は、巡礼地内部でも変化を引き起こしており、その一つが番外札所の成立となってみられる。別の角度からは巡礼路の複雑化が指摘できる。巡礼路は、元来札所間を結ぶ経路であるが、巡礼の発達に伴って、著名社寺や名所旧跡への参詣、また巡礼路の危険区間を回避する経路などが現れる。札所間を結ぶだけの経路を基本的経路とすれば、それ以外の経路は発展的経路とすることができ、近世の西国巡礼では主要な発展的経路だけでも7を数える

ことができる。そして実際の巡礼者たちは、近世には多く発展的経路を利用していた。

以上、日本の複数聖地巡礼に限定して、諸形式の巡礼、巡礼の発展に伴い生じる現象について述べてきた。諸形式の巡礼については日本独自のものであろうが、巡礼の発展過程に伴う様々な現象については、諸外国の巡礼とも比較検討が可能なことであろう。巡礼の本質を考える上で、巡礼地に焦点を当てれば、ただ形態的な比較のみならず、こうした具体的な現象面での諸外国との比較が今後の課題となるだろう。

注

1　四国八十八ヵ所の巡礼のみ遍路と通称されるので、ここではそれに従う。

2　一つの動向としては、最近若手研究者が、各分野から巡礼研究を推進している。たとえば、浅川泰宏「遍路道を外れた遍路──新しい巡礼空間モデルの構築に向けて──」『日本民俗学』226号、2001、pp. 35-69；近藤隆二郎「北播磨のミニチュア巡礼地における成立プロセス」『ランドスケープ』60巻5号、1997pp.561-566；中山和久「巡礼と現代──関東三十六不動霊場を中心として──」『日本民俗学』211号、1997、pp.32-65；森正人「遍路道にみる宗教的意味の現代性──道をめぐるふたつの主体活動を中心に──」『人文地理』53巻2号、2001、pp.173-189；同「場所の真性性と神聖性──高知県室戸市の御厨人窟を事例に──」『地理科学』56巻4号、2001、pp.42-61などの研究がある。
また行政をはじめとして各分野から四国遍路を対象にした研究が推進され、早稲田大学道空間研究会編『現代社会と四国遍路道』同刊、1994；同会編『四国遍路と遍路道に関する意識調査』同刊、1997；長田功一・坂田正輝編『現代に生きる四国遍路』(CD-Rom版)早稲田大学、1998；愛媛県『四国遍路のあゆみ』愛媛県生涯学習センター、2001；稲田道彦『景観としての遍路道と遍路の行程の変化』香川大学、2001；頼富本宏・白木利幸『四国遍路の研究』国際日本文化研究センター、2001などが相次いで刊行されている。

3　大槻文彦編『新編大言海』冨山房、1982

4　新村出編『広辞苑(第二版)』岩波書店、1979

5　大野晋ほか編『岩波古語辞典』岩波書店、1974

6　拙稿「巡礼と順礼──文献史料と納札からみた中世の西国巡礼の表記──」、巡礼研究会編『巡礼論集１』岩田書院、2000、pp.69-96

7　小池長之「巡礼」小口偉一編『宗教学事典』東京大学出版会、1972

8　小池長之「巡礼」『万有百科大事典　4　哲学・宗教』小学館、1973

9　前田卓「巡礼」『社会科学大事典10』鹿島出版会、1969

10　真野俊和「巡礼」桜井徳太郎編『民間信仰辞典』東京堂、1980

11　小嶋博巳「巡礼」佐々木宏幹ほか監修・池上良正ほか編『日本民俗宗教辞典』東京堂、1998

12　円仁「入唐求法巡礼行記」『大日本仏教全書72』鈴木学術財団、1972

13　村山修一『比叡山史─闘いと祈りの聖域─』東京美術、1994、pp.209-220

14　速水侑『観音信仰』塙書房、1970、p.264

15　"Oxford English Dictionary," Oxford Univ. Pr., 1961

16　"Grand Larousse Encyclopedique," Librarie Larousse, 1960-1975

17　J.Grimm und W. Grimm, "Deutsches Woerterbuch," Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984

18　P.G.W. Glare ed., "Oxford Latin Dictionary," Oxford Univ.Pr., 1982

19　亀井孝解説『日葡辞書』勉誠社、1973

20　淡野明彦・田中智彦『旅のエチュード』昭和堂、1993、pp.97-98

21　星野英紀『巡礼─その意味と構造─』講談社、1981、p.160

22　アルフォンス・デュプロン編(田辺保翻訳監修)『サンティヤゴ巡礼の世界』原書房、1992

23　「妙法蓮華経」『大正新脩大蔵経　9』大正新脩大蔵経刊行会、1925
24　「仏説阿弥陀経」『大正新脩大蔵経　12』大正新脩大蔵経刊行会、1924
25　中尾堯編『古寺巡礼辞典』東京堂、1973、p.191
26　「寺門高僧記」『続群書類従　28上』続群書類従完成会、1983
27　速水侑、前掲書、pp.248-299
28　室町期に民衆の巡礼が増加したことは、速水、前掲書、pp.300-336参照。また修行的巡礼のあったことは、『大乗院寺社雑事記』によれば、聖護院道興が文正1年(1466)7月24日に山伏30人、総勢70人で巡礼の途中、南円堂に参詣している。
29　新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982、p.434
30　国書刊行会編『言継卿記　2』続群書類従完成会、1998
31　天野信景「塩尻」日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成　第三期10』日本随筆大成刊行会、1930
32　野田成亮「日本九峰修行日記」宮本常一編『日本庶民生活史料集成　2』三一書房、1969、pp.3-262
33　近世の供養塔調査によれば、宗教者よりも一般の人々が六部をしていることが多い。田中智彦・小嶋博巳『六十六部廻国供養塔のデータベース構築に向けての基礎研究』聖徳学園岐阜教育大学、1997参照
34　同上
35　竹内理三編『鎌倉遺文 18』東京堂、1996、p.395
36　西園寺源透「四国霊場考」『伊予史談』234号、1938、pp.653-681
37　増補「史料大成」完成会編『増補史料大成　37』臨川書店、1992、p.120
38　増補「史料大成」完成会編『増補史料大成　42』臨川書店、1992、p.228
39　新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書　4』臨川書店、1968、p.508
40　大法輪閣編集部編『全国霊場巡拝事典』大法輪閣、1997、p.369
41　増補「史料大成」完成会編『増補史料大成　44』臨川書店、1992、p.178
42　新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書　2』臨川書店、1969、p.82
43　拙稿「近世大坂における巡礼」『大阪商業大学商業史研究所紀要』3号、1994、pp.99-137
44　石崎直義「越中人の二十四輩順拝の旅」『空間認知の歴史地理』歴史地理学会、1985、pp.151-172
45　たとえば、真能義彦『親鸞聖人・蓮如上人御旧跡二十四拝順拝記』顕道書院・法園社、1911; 春秋庵主人『親鸞聖跡二十四輩順礼』宝蔵館、1923などがある。
46　大法輪閣編集部編、前掲書、p.464
47　中尾堯編『古寺巡礼辞典』東京堂、1973、p.305
48　たとえば姫路市下手野町には岡山誕生寺を指す明和4年(1767)の道標、高砂市阿弥陀町には高砂十輪寺を指す明和2年(1765)の道標、大阪府太子町山田には當麻寺を指す明和3年(1766)の道標がそれぞれ建立されている。
49　但馬六十六地蔵尊巡拝復興有志会編『但馬六十六地蔵尊霊場要集』同会、1983
50　前田卓『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房、1971、pp.119-126
51　拙稿「昭和30・40年代の秩父巡礼　(1)」『大阪女子短期大学紀要』15号、1990、pp.13-28および、「昭和30・40年代の秩父巡礼(2)」『大阪女子短期大学紀要』16号、1991、pp.21-37
52　Tanaka Hiroshi, "The Evolution of a Pilgrimage as a spatial-symbolic Systems," Canadian Geographer 25-3, 1981, pp.240-251
53　拙稿「近畿地方における地域的巡礼地」『神戸大学史学年報』1号、1986、pp.45-63
54　巡礼は原則的に規定数の札所をめぐらなければ満願にはならず、四国遍路における十ヵ所めぐり、一国めぐりなど、巡礼者が自ら札所数を減らして巡礼することは、不完全な巡礼といえる。
55　前掲53
56　塚田芳夫『日本全国三十三所・八十八所集覧』自刊、1981、および「追録」。ただし北川宗忠『「全国三十三所」巡礼総覧』流通経済大学、1995には、塚田よりもさらに多くの巡礼地が掲載される。
57　近藤隆二郎「和歌山県下における地域的巡礼地の展開過程と空間構造」『ランドスケープ研究』61巻5号、1998、pp.465-470
58　山上貢『新篇津軽三十三霊場』陸奥新報社、1973、p.33
59　前掲43参照

60　伊勢市古市の寺院門前に、「円光大師准廿五霊場」と刻む石標が建つ。
61　伊賀廿五霊場編集委員会編『伊賀廿五霊場──教区内四十九か寺院紹介──』浄土宗伊賀教区教務所、1982
62　兵庫県山東町矢名瀬の長栄寺に寛政11年(1799)の「円光大師順拝所二十四番」と記す額がある。
63　大阪市内の寺院には、円光大師石像に番号を付したものがみられ、かつてはミニチュア巡礼地が成立していたことを物語る。
64　山口喜久「和田山町の石造遺物」『和田山町の歴史』12号、1993、pp.18-25
65　前掲29、pp.471-472
66　同上29、p.473
67　同上29、pp.1123-1128
68　前掲57によれば、近藤は三十三所堂や八十八所堂を建築内巡礼と分類する。
69　石川知彦「三十三所観音曼陀羅について──華厳寺本と観音正寺本の図像的諸問題──」『仏教芸術』189号、1990
70　続群書類従完成会編『続群書類従　13上』続群書類従完成会、1986、pp.21-22
71　竹内理三編『増補続史料大成　22』臨川書店、1978、p.377
72　続群書類従完成会編『続群書類従　12上』続群書類従完成会、1986、pp.486-487
73　増補「史料大成」完成会編『増補史料大成　39』臨川書店、1992、p.155
74　以下の論考は、拙稿「西国巡礼の始点と終点」真野俊和編『講座日本の巡礼1　本尊巡礼』雄山閣、1996、pp.104-126を参照。
75　円宗『秩父順礼独案内記』辻村五兵衛・上原勘兵衛、1745(延享2)
76　宮崎建樹『四国遍路ひとり歩き同行二人　別冊』へんろみち保存協会、1991、pp.87-88
77　西国札所会編・佐和隆研著『西国巡礼』社会思想社、1988、pp.200-225
78　兵庫県教育委員会編『歴史の道調査報告書1　西国三十三所巡礼道』同刊、1991
79　勝沼武一編『西国観音縁起集』慈眼会、1893では、まったく花山院には言及されていないが、西国札所聯合会編『西国順礼案内記』同刊、1922には、札所以外に花山院だけが掲載される。
80　各経路の詳細については、拙稿「巡礼の成立と展開」遠日出典編『日本の宗教文化(上)』高文堂出版、2001、pp.193-232参照。
81　拙稿「石山より逆打と東国の巡礼者──西国巡礼路の復元──」『神戸大学文学部紀要』15号、1988、pp.1-23、なお本稿では成立年を明和・安永頃としたが、その後の研究により、安永初め頃と限定できた。
82　拙稿「秩父阿熊通りについて」『埼玉地理』8号、1984、pp.36-39

【Abstract】

Development of Pilgrimages in Japan

TANAKA Tomohiko
Gifu Shotoku Gakuen University

This paper investigates the characteristics of Japanese pilgrimages, the overall development, and the resulting phenomena.

A fundamental meaning of the word for pilgrimage in Japanese"junrei"is the circulation of sacred sites. Thus, circulation is the purpose of "junrei" activity. On the other hand, the word "pilgrimage" in English or in other languages borrowed from Latin refers to moving forward to a promised sacred site.

Pilgrimages usually consist of three significant elements: sacred place(s), pilgrim routes, and pilgrims. As in Western countries, a pilgrim place is equal to a sacred site and is the goal for pilgrims. For example, at Santiago de Compostela, there are several pilgrim routes with different starting points leading to a common goal. However, in Japan, a "junrei" pilgrim place consists of a group of sacred sites which are usually numbered (hudasho), forming the area of the pilgrims' circulation. In sum, junrei refers to the entire course, which binds the sacred sites from start to finish.

There are many types of junrei, which can be classified according to the objects of worship: Buddhist deities, Shinto deities, the founders of Buddhist sects, and others. Each type of junrei has a fixed number of sacred sites.

According to historical documents, ascetics were making pilgrimages from the end of the Heian to the Kamakura period (ca. 1100-1250 A.D.). It was at this time that the pilgrimage to thirty-three sites connected with Kannon first came into being in Japan. The pilgrimages from this period were relatively larger in scale than in later periods. While the details are not known, many types of pilgrimages evolved in the middle of the Muromachi period (1400s) and the middle of the Edo period (1700s). Moreover, many new types of pilgrimages have developed since the years of high economic growth (1960-1970).

With the development of two major pilgrimage routes in Saigoku and Shikoku, various phenomena have occurred. The first is an increase in pilgrims. People come from a wider area than ever before, and the type of pilgrim has also changed, i.e. from religious masters to ordinary people. Another interesting phenomenon is that a large number of "miniature" pilgrim places based on original sacred sites have been constructed throughout Japan. Through the addition of these new sacred sites, the original pilgrim places have expanded externally as well as internally.

Finally, on some pilgrim courses, new routes have been developed from the original routes which just followed the designated sacred sites. These newly developed routes include byroads to visit relics, famous temples and shrines, and can even be a means to avoid the risk of taking a ferry boat.